

■ 2025 年の共通テストから、数学の選択形式が特に IIBC において大きく変更になったことは注意すべきことと思われる。数学 B の「数列」「統計」、数学 C の「ベクトル」「複素数平面」の合計 4 項目から、3 項目の問題を選択解答する形式になった。もちろん、これまでも IIB においては、旧数学 B の「数列」「ベクトル」「統計」の 3 項目から 2 項目を選択解答するという形式であったが、「統計」の選択者はごくわずかで、「数列」「ベクトル」を解答するものがほとんどだった。現実には、2025 年の試験で、受験生はどのような選択を行ったのであろうか。

■ Benesse の自己採点データ資料によれば、次のとおりである。

●設問別成績概況● 大問 出題ジャンル	満点	受験者数	平均点	標準偏差	得点率(%)
1 三角関数	15	115,315	7.5	4.8	<div><div></div></div>
2 指数関数・対数関数	15	115,315	8.0	4.8	<div><div></div></div>
3 微分法・積分法	22	115,315	13.6	4.7	<div><div></div></div>
4 数列	16	109,993	7.4	4.7	<div><div></div></div>
5 統計的な推測	16	77,747	6.6	4.8	<div><div></div></div>
6 ベクトル	16	103,330	7.8	4.7	<div><div></div></div>
7 複素数平面	16	50,212	8.5	4.7	<div><div></div></div>
TOTAL	100	115,315	51.4	23.0	<div><div></div></div>

大問 4~7 の選択率(受験者数×100/115,315) は下表のようになる。

			受験者数	選択率	非選択率
数B	4	数 列	109,993	95.4	4.6
	5	統 計	77,747	67.4	32.6
数C	6	ベクトル	103,330	89.6	10.4
	7	複素平面	50,212	43.5	56.5

ここで注意すべきは、この 4 問の受験者数の総計

341,282 が、数 II の受験者数×3=345,945 よりも 4,663 だけ少ないということである。これは、数 II 問題を解答した受験生の中に、数 BC の選択問題の一部（または全部）を解答しなかった者が少し存在したということを表している。

したがって、表の非選択率の総計が 100 を超えて、104.0%になっており、数列の非選択率 4.6%がそのまま「統計」+「ベクトル」+「複素平面」という選択率とは言えないことに注意したい。

■ とはいえ、この試験が始まる前からの「統計を選ぶか複素数平面を選ぶか」という悩ましい選択の結果としては、統計を選ぶものが一定多かったという結果である。

想像で述べれば、複素数平面を文系の受験生は選ばず、理系の受験者が選ぶという傾向があったのであろう。

再三指摘してきているが「統計」の問題が、毎年同じような決まりきった傾向の出題で取り組みやすかった時代（その時代には選択者はごくわずかであっただろう）は昔のものになったと思われる。仮設検定なども普通に出題される内容も、その難化傾向に拍車をかけている。

また、複素数平面は、理系の生徒の一般入試における試験範囲に含まれることがほとんどであるため、理系生徒にとっては対策がしやすい分野であろう。ただし、これも指摘してきていることだが、「複素数平面」は 2 次曲線などの内容を含み、取り組むべき内容が結構広いことに注意したい。

■ 大学入試センターは 2023 年から、細かい試験情報データを公表しており、2025 年についても

[令和 7 年度 試験情報データ（本試験） | 独立行政法人 大学入試センター](#) に次のデータを載せている。

- 01\_設問別得点率及び正答率表（令和 7 年度大学入学共通テスト本試験\_\_全教科・科目）
- 02\_科目別成績分布（令和 7 年度大学入学共通テスト本試験\_\_全教科・科目）
- 03\_（参考）csv データの説明
- 04\_設問別正答率グラフ（令和 7 年度大学入学共通テスト本試験\_\_全教科・科目）
- 05\_科目別得点の累積分布（令和 7 年度大学入学共通テスト本試験\_\_全教科・科目）

しかし、正直言って見やすいものではないことと、知りたいデータがきちんと載っているとも思えない。

実際、IIBC の選択問題の選択率（あるいは、受験者数）といったものは見当たらない。